

---

shadow,If もしも奇跡が起きたなら。

クロック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

shadow - If もしも奇跡が起きたなら。

### 【ZPDF】

Z3396

### 【作者名】

クロック

### 【あらすじ】

これは、ある不幸な少年が、見事幸運をつかむことができた物語。  
( shadow - the - story の IF になっています )

## 第一話『悲劇が起きた世界』（前書き）

IFの物語は前から書こうと思つていました。

見方次第だと、これが shadow の正規ルートなんです。  
ストーリー展開は、なのは本編に沿つて進む予定です。

では、皆様あまり期待せずお楽しみください。

## 第一話『悲劇が起きなかつた世界』

人間の歩く道は、時にいくつかの分岐が生まれる。

たとえば、一人の少女が『ケーキを食べたい』と思う、だが、彼女はダイエット中で、食べるわけにはいかないとと思う心がある。

結論を言うと、彼女はケーキ食べた。

そのために太ってしまった。

ただ、それだけのお話……。

だが、もし彼女が食べなかつたらどうなつたか。  
太らなかつたのではないか……。

このように、人の考えはその時その時で、数多の分岐があるのである。

この物語は、一人の人間が正しい分岐を見つけることができた物語である。

「天氣は快晴……雨ならいいのに、戦場も見渡す限り廃墟以外何

も無し……最悪だな」

『うう、肩を落とすのは、真っ蒼な髪が特徴の少年、『灰色の天使』レン・クロフイール、

「うう、ショミーラーターだから、天気が変わるわけはないんだけど」

意外にまじめな突っ込みを入れているのは、女装が無駄に似合つ少年、『音速の幻影』ラファイン・セントリア、

「天気が良いことは、きっと良いことだよ～」

バカ丸出しの台詞を、元気よく言うのは、レン曰く不本意な彼女、『撲殺の女神』セシリア・フローゼルである。

99%天然な彼女の台詞に、レンとラファインはため息をつき。

「「馬鹿だから、喋るな……」」

とヒンションの低い声で言うのである。

さて、現在彼らがいるのは、時空管理局本局、……の訓練施設。だが彼らの所属は地上本部独立隊、第七独立武装中隊。七の数に意味はないが、これまで地上で英雄的活躍を見せた部隊である。

さてそんな彼らがここにいるのには、それなりの理由がある。

「教導隊との、特別演習?」

首を傾げながら、疑問符を浮かべているのは、

第七独立武装中隊、デルタ分隊現分隊長、レン・クロフィール  
…三等空佐。

「正式にいえば、教育ビデオの録画協力だがな、3日後の朝から  
だ……面倒だから後は頼んだぞ……」

「う、面倒だから頼む……とレンに言つてゐるオッサン。ではな  
く人物は、この第七独立武装中隊の部隊長、ミハイル・フローゼル  
一等空佐である。

レンは面倒だと思いながらも、自分の上官であり、師匠である人  
の「」とを無視する「」とはできないので

「……はい、分かりました」

渋々、そう答えて部屋を出ようとしたら、レンは少し思ったこと  
があるのか部屋へ振り返り、  
ミハイルに向かつて、こんな質問をした。

「ヒーリーで隊長、ロミット制限はどの段階までですか?」

微笑を浮かべながら、楽しそうに回答を待つレン、その姿に苦笑を  
浮かべたミハイルだったが、すぐに口を開いた。

「……全開で、叩き潰せ!」

「了解!」

別命、破壊神師弟……考えたら大体のことが一致してしまったのは偶然である……と思いたい。

これが、レン達がここにいる理由である。

ちなみにビデオの内容が『高ランク魔導士複数相手に、都市の被害を少なく殲滅できるか』なのは、きっと偶然である。

だが以前、中隊に教導官が来たときに、デルタ分隊が教導官を無視したことで恨まれているのは言つまでもない。

「なんで、私たちがこんなことしないといけないんだろうねえ~

」「いろいろあつたんだ……いろいろ……」

「……」

セシリ亞の質問に、少しだけ苦笑しながら、答えにくそつに答えるレン。

決して、兄妹の仲が最近悪いので、刺激してはいけないと考えているのは、きっと気のせいであると願いたい。

ついでに言ひうと、沈黙はラファインであつて、セシリ亞が怪しいでるわけではない。

『そろそろ時間なんだが準備はいいか……』

ナイスタイミング!! レンはそう考へると、すぐさま『準備完了』の合図を出し、一人に戦闘準備をするように急かし、レンもテバイスを起動し、騎士甲冑をセットする。

レン、ラファイン、セシリアの三人がセットした騎士甲冑は、各個人的なものだが、一つだけまったく同じものがある。

黒きコート……黒衣である。

これはレンがつけていたバリアジャケットをモデルとした、デルタ分隊0番隊の共同モデルなのである。

三人は、その黒衣を靡かせながら、ビルの上で風を受けている。ちなみにレンは、『本局の設備すげえ~』と思つていたのは、また別のお話。

まあ、そんなこんなで始まつた合同演習なんだが、まず、状況を説明しよう。

\* レン達は設定では、極悪な高ランク魔道士。

\* 教導隊の魔道士は、20名前後……全員がAAAランク以上。

\* 戦場は、廃墟都市の設定になつていてる。

絶対恨まれてる…… レンはいつもながら…… IJの設定を見直していた。

IJでレンはふと考えた、『本当にたたきのめして呪いんだらつか? やつぱり、ちゃんと撮影に協力すべきだろ? か?』結論を述べると、レンは後者を答えの出やつとしたのだが、

「楽しみだな」

（セシリアのただの鼻

歌です、ただレンには、撲殺 絞殺 滅多打ち と聞こえています）

「滅殺、滅殺、滅殺、滅殺、滅殺、滅殺……（念仏に聞こえます）」

「…………あれ、命が危ない?…………

IJのところのストレスが溜まっていたセシリ亞と、戦闘になると、何かしら恐れしことに陥り始めるラフアインを見て、レンは、恐怖で自暴自棄となるのであった。

所変わつて、教導隊の面々なのだが、

「呑き潰すぞ……」

『おおおおおおおおおお…………』

教導隊の皆さんは、レンの予想どおり、ものすごいテンションで打倒第七独立武装中隊を掲げていた。

「ところで、今回来ている面々の資料は」

先ほど全員を激励していた、今回の指揮官と思われるこの男は、過去に第七独立武装中隊、デルタ分隊へ教導にきた、教導官である。ちなみに彼を一番無視していたのは、ラファインでもセシリ亞でもほかの部隊員でもなく、レンであるのは言うまでもない。

「司令官いらっしゃるです」

「うむ……。なにに、今回来ているのは『灰色の天使』『音速の幻影』『撲殺の女神』、今日こそ雪辱を晴らす時が来たようだな」  
このあと、司令官は高笑いを始めて、テンションが高いはずなのに、それを見ていた部下たちは後に気付いた、笑いながら、恐怖で震えていたことに……。

余談ながら、この司令官が、数十分後には表現不能な状態になってしまるのは、気が向いたら別の機会に……。

レン・クロフイールとHリオット・ラージュスト + のオールナ  
イト全時空

レン  
「帰つて参りました。O&Aのときの「コンビ」、レン・クロフイ  
ルと……」

Hリオット  
「Hリオット・ラージュストでお送りします」

レン  
「始まつたな、EF企画。これは無謀な作者が、どうしても書き  
たいからと始めてしまつた無謀企画です……」

Hリオット  
「基本無謀と理解してやつてるので、生温に田で『覗く』だけ  
と作者は……」

レン

「鳥肌をたたせて、ページながり執筆をします」

Hリオット

「ヒーリで気になる」とがあるんだけ……

レン

「えうした、Hリオット?」

Hリオット

「+ってあるけど、いつたい誰が来るんだ」

レ  
シ

# 音速の幻影の一つ名が似合

「君の名前は？」

ラファイン

「どうも皆様、ラファインです！！」

## エリオット

「年をとつて……」こんなに髪の毛が「

ラブ  
ア  
イ  
ン

（田を逸らしてまわ）

「ねえ、レン、沈黙はきつしからやめて！！！」

卷之三

ラファイン

「だからレン、おれの眼を見て言つてよ……。」

エリオット

「さて、ハゲはほつといて、コーナー『ラファインの趣味発掘』

を始めたいと思<sup>う</sup>い<sup>う</sup>ま<sup>う</sup>す

ラファイン

「ねえ、ちょっと待って、それって僕がひどい田にあつP-11-1  
じゃないの」

レン&Hリオット

「…………（ものまく笑いをこらへ）…………」

えて）「

ラファイン

「…………もういいや。それで僕は何をすればいいの？」

レン

「この紙に書かれた、『ラファインです』、できる簡単な趣味ベ  
ストX』の中から、選んでやってみようと思つただけビ……」

ラファイン

「なに、その僕の人権をほほ無視したような物は……」

Hリオット

「作者の有名な著書（嘘です）」

レン

「とりあえず一一番最初にして最後の項目は……」

ラファイン

「少ない……異常なほどに少ないよ……」

レン

「ラファイン、うるさいことよ……。では、早速やってもらいましょ  
う、ラファイン・セントリアで『逆立ちしながら、ピアノを弾く』

です。どうで……」

ラファイン

「できるか……！」

レン

「ラファイン……そこはノリで弾いつよ……」

エリオット

「ヘタレ……他作品のヘタレーズ達を上回る、ヘタレっぷりだな」

ラファイン

「僕、何か悪いことした！？ 至って普通の反応だよね」

レン

「ヘタレはみんな同じことを言つ」

エリオット

「ラファイン……失望したぜ」

ラファイン

「失望する所じゃないから…… まじめな反応をしただけだから  
……って、二人とも聞いているんですか……！」

レン&エリオット

「「そろそろ放送時間のほうもわずかとなりましたねえ～」

ラファイン

「無視しないで……！」

レン

「次回はどのようなゲストの方がきて貰いたいのか?」

ヒリオット

「ゲスト召喚してほしい、またはしたいといつ方は、郵便もファンクスもりません、感想かメッセージで作者にお伝えください」

レン&ヒリオット

「また次回、お会いできるのことを心より楽しみにしております」

## 第一話『悲劇が起きた世界』（後書き）

さて、L·E·DGEのよひで、2カ月一回更新にならなことよひに頑張ります。

感想、意見、お待ちしております。

## 第一話『出向任務前夜』（前編）（前書き）

取りあえず第一話です。

ゲストの予定があるので、時間の都合上、次回に回します。申し訳ございません。

## 第一話『出向任務前夜』（前編）

第七独立武装中隊……それは管理局で、ある程度発言権を持つた権力者にしか、隊への指示どころか、隊舎の位置すら教えてもらえないなど、完全秘密主義をとっているエリート部隊、後見人は、レジアス・ゲイズ中将になっている。

地上の部隊に所属するが、部隊長ミハイルが前に聖王協会の騎士団の騎士団長していたことがあり聖王教会との関係が親密である。デルタとアルファの二つの部隊を合わせた中隊、だが実際は人数的に大隊に含むべきとの声が多いが、隊長がいつまでも、大隊指揮が取れないため、今現在は保留……。

「なかなか面白いことになつてゐるぞ」

そういうのは、部隊長のくせにサボリ症のミハイル・フローゼル。そして言葉を聞いているのは、アルファ隊副官、エリオット・ラージュスト三等空佐、彼は状況を見てこう述べる。

「取りあえず、面白いのではなくて、ヤバイことになつているのでは？」

そんな会話をしている。エリオットとミハイルが見ているのは、

二日前本局で取られたビデオである。

ビデオの内容は、当初の予定のものとは大きく異なつていて『少數のエースが、大部隊を殲滅する様子』となつていて、映像を見ると、レン、ラファイン、セシリアの三人が、本局の魔導士を吹つ飛ばしている画が映つている。

エリオットは『何やつているんだ……？』 そう言つてため息をついていたが、ミハイルは『こう言つた。

「あいつらは、陸と海の決定的な壁を取り払つているんだ」  
「…………？？？」

エリオットは疑問符を浮かべながらその言葉を聞いた。  
ミハイルは、『分からぬか……それも仕方ないか』 そう呟くとある資料を出した。

その書類には書いてあつたのは『第七独立武装中隊より、機動六課への特別出向選抜』この書類の所為で、とある事件が勃発するは別のお話。

「「ああ、やつと帰つてこれた……」」

悲痛なる魂の叫びをあげているのは、レン・クロフィールとラフ・アイン・セントリアの二人。

彼ら二人は、恐ろしき二つ名の通り、本局の訓練施設で大乱闘をしてきたのだが、もう一人の馬鹿……もとい、セシリ亞・フローゼルが、力任せにぶつ壊した設備を、三日かけて修理してきたのである。

「ただいま～」

ただ一人だけ、セシリ亞がとても元気なのは、機械についてはさっぱりだから＝馬鹿だから何もできなかつたからである。

「「…………」」

レンとラフアインは、『いつか覚えておけよ……』と心中で思いながら、顔では平静を装つている。

「遅かつたのですね……三人とも……」

少し声を低めにした、お嬢様口調で、威圧するよひにしゃべつているのは、レイチエル・シユリーク。

第七独立武装中隊の中で、ある意味最も個性的なキャラを持つ、リアルお嬢様である。

「ああ、いろいろあつたんだ。いろいろ……」

レンは、ものすこしく疲れたと言わんばかりに、全身を脱力をさせてそう言った。

それを聞いた、レイチヨルは、

「それは大変でしたのね…………」

「それはもう……言葉では言いたくないほどに…………」

「…………」「…………」「…………」

「」の一人の会話は、長く続かない。

先にどちらか一方が、会話の流れを止めてしまうのである。これは決して仲が悪いわけではなく、口数が少ない彼ら一人ならではの問題点といったところだろう。

「それでレイチヨル、お前が出迎えに来るつていう」とは、呼び出しか?」「

「ええ、そうですね」

それを聞くとレンは、かなり嫌な顔をしながら、少し熟慮した後。

「取りあえず、部屋に戻つて荷物を片づけてからでいいか?」

「そのぐりこなら、許されると……思いますわよ」

レンとラファインは、『思いますわよ』の言葉を少しひつかけながら、彼らは部屋へ向かった。

ちなみにセシリ亞は、レンとレイチヨルが会話をしている間に、どこかに行つてしまつているのは黙認していいのか悪いのか分からぬ、事実である。

「入りたくない……なぜだろ?」

「ラファイン奇遇だな、俺もなぜか入りたくない」

かれこれ扉の前で20分、ラファインとレンがものすゞく嫌な顔  
門限を軽く3時間くらい飛ばしてしまった子供のよつな顔を  
して、肩を落としている。

「ラファイン、上官命令だ。開けてくれ」  
「レン分隊長、上官いらしく堂々と……」

こんな会話を28回ほど繰り返して、たすがに疲れてきたレンが、  
『ええい! どんな風にでもなりやがれ! ! !』と書いて、思いつ  
きり扉を蹴り飛ばした。

扉を蹴り飛ばしたレンが見たのは……真つ青な顔で、真つ白な目  
で書類を見ているエリオットの姿があった。

約20分くらい遡る。

レンとカラヴァインが『お前が開けろ！』と言つて、この20分の間、こんな会話があつた。

「エリオット、この資料を見てくれ」

「なんですか？」

エリオットが見ているのは、古代遺物管理部機動六課への選抜出向人選、条件項目。

- \* 第七独立武装中隊、0番隊より選抜すること。
- \* 公式の記録でランク以上の魔導士にすること。
- \* 前線での指揮ができる、中隊指令資格所持者にすること。

「部隊長。これはいつたい何ですか？」

「何って、読めばわかるだろ？ なんかカリムちゃんに頼まれて、うちから機動六課つて部隊に、メンバーを送つてくれつて頼まれてや」

エリオットは、なに考えているんだ？ この馬鹿野郎！……。つて本気で口を滑らせそうになつたが、声になる手前でギリギリで抑えた。

そして、できる限り自然な言葉で、話そつと努力し、かなり口を滑らせそうになりながら、質問をすると……

「……なに考えて、いらっしゃるのですか？」

「なにも考えてない。頼まれたからそうした」

その言葉を聞いて、エリオットは数秒間、何度も頭の中でこの言葉を繰り返し、

そして完全に意味を理解したといひで、こめかみに青い筋が立ち始め……。

さらに十秒後、現在の隊の状況を思い出し、何かしらのトロ事件が起きた場合の状況を考え初めて……約五分後。

最後に送つてよそそな人員のことを頭の中で考えること、十五分。

頭の使いすぎでパニックになつてゐるエリオットの顔は、見るに堪えないほど真っ青になつてゐた……ついでに目も白く……。

そのタイミングで、レンが扉を蹴り飛ばしたのであつた。

「エリオット！ その顔どうしたの！？」

真っ青な顔をしてくるエリオットを見て驚いたラファインが呼びかけ、すぐに駆け寄る。

「…………？」

エリオットは何かを喋ろうとしていたが、もはや同様のし過ぎで、言葉にすらならない。

レンは、エリオットが先ほどまで読んでいた書類を拾い、その内容を読むことでエリオットがどうしてこのよつになつたかを理解した。

そして彼は、現在の部隊の状態などを冷静に判断して、部隊長ミハイルの話しかける。

「師匠。遅くなつてしまい申し訳ありません……挨拶はここまでにして、一つお聞きしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「おうーなんだつていいぞー！」

青ざめているヒリオットを見ながらレンは、取りあえず発音を間違わないうちに丁寧な言葉で述べる。

「とりあえず現状を見る限りでは、この部隊からの出向可能な人数は4人ですが、非常時の緊急出動を考えると、その中から半数の二人を出すことが最適だと思われます。あと出向可能な人員ですが、ここにいる三人か、任務中のジュリアですので、可能なのはこの三人だけです」

長々とこゝまでしゃべつて、レンは一区切りして最後にこゝつ述べる。

「そして、俺はデルタ隊の司令官として動くため忙しいので、両分隊の副隊長を出すことをお勧めします」

これは最良の案だと言わんばかりのレンは、自信満々で堂々と自分を枠外に外す。

それを聞いていた、ミハイルは、こゝつ感想を述べた。

「それはいい考えだ！……では、うちの部隊からの出向は……」

普通の考え方なら、『『はエリオットとラファインとなるが、このミハイルという男は、少々普通の人間とは違う考え方を持つている為か、こんな結果をもたらした。

「……エリオットとレン。お前たち一人だ……」

突然の返答……いや、それ以前にレンが言っていたことと全く関係のない回答を出したミハイルの発言に、レン、エリオット、ラファインの三人は思考回路を約五秒停止させたうえで、三人同時に間抜けな声で……。

「「「はい！？」」」

目が点になつていてる三人だつたが、レンは……レンだけは、自分の身に降りかかる可能性がある予測が立つたため、それを防ぐため全力で思考を回復させ、大声で……

「なんで！…そつなるんだよ！…！」

ものすごくツッコンだ。

レンからの言葉を聞いたミハイルは、『なんでつて言われても……』と呟きながら、『うう答える。

「得に理由はない」

「！…」

『の野郎……馬鹿だと言つても限度があるだろ！…とレンは……』言つてしまつた。

「この野郎、……馬鹿だと言つても限度があるだろ……」

「おい！俺は一応、お前の上官なんだが……」

「知るか！……馬鹿に馬鹿といつて何が悪い」

「バ……力……？」

馬鹿と何度も言われたミハイルのこめかみには、かなりの青筋が立っていた。

その状態のミハイルに、レンは追い打ちをかけるようにこいつ言つた。

「わしきかじり立つてゐだらうが、この馬鹿師匠……」

「………………」

それは一瞬だった。

現最強の騎士ミハイル・フローゼルは音もなく。机を隔てて暴言を吐いていたレンを、壁に埋めた。それも圧倒的な腕力で……。

埋められたレンに意識が残つてゐるわけもなく……わずかに見える右腕が、力なく垂れていた。

「ヒリオット、明日からレンと出向だが。別に問題はないな

「…………全く御座いません」

ヒリオットは冷や汗をかき、視界から消えたレンを見てそつ答える。

ついでに壇うつと、ラフマインはレンを壁から抜こうとしたが、抜けなかつたそつだ。

名前：レン・クロフイール

『灰色の天使』

年齢：17歳

身長：176.7cm

体重：57kg

誕生日：2月3日

出身：第97管理外世界地球極東地区日本国海鳴市（発見された  
地点が）

階級：三等空佐

血液型：A B型〔名義上であるため、実際は不明〕

利き腕：右

好き：苦い物、コーヒー、ビターチョコ、模擬戦、思い出、格闘  
技、剣術

嫌い：甘いもの（ある程度、食べられることができるようになつた）、紅茶、レモンティー、バカ、自らの正義を押し付ける人、管理局の偉い人、セシリ亞？

趣味：格闘技、読書、ギター、キーボード、ピアノ、歌

容姿：蒼髪「純度の高い青」黒い瞳

魔導士ランク：空戦SS（非公式では、SSS++♪測定不能）

希少技能：多重術式、魔力分解、月光唱、模倣、e t e . . .

魔力変換資質：凍結

デバイス：シャドウ・ライト

シャドウ・ライト詳細データ

使用術式、古代ベルカ式 + ミッドチルダ式 + ? ? ? + ? ? ?

戦闘形態：剣、双剣、拳銃、狙撃銃、旋棍、杖、e t e . . .

待機状態：両腕に腕輪

モード形態：6つ

フォーム形態：1・ウェポン、2・ブラスト + エンジェル、3・ブレイカー . . .

名前：エリオット・ラージェスト

『煉獄の死神』

年齢：17歳

身長：177・1cm

体重：61kg

誕生日：11月18日

出身：第一管理世界ミッドチルダ西部アルトセイム

階級：三等空佐

血液型：O型

利き腕：右

好き：甘いもの、紅茶、レモンティー、模擬戦、レン、その他同僚、ベース、歌

嫌い：苦い物、ビターチョコ、コーヒー、ゴーヤ

趣味：走ること、遊ぶこと、魔法の術式調整及び新しい公式の研究、格闘技、ベース

容姿：銀髪、碧眼、ショートヘア

魔導士ランク：総合S+（非公式では空戦SSS++（規格外）

希少技能：無

魔力変換資質：炎

デバイス：フォルス

フォルス詳細データ

使用術式、ミッドチルダ式「インテリジェントデバイス」

戦闘形態：機械的な杖、鎌、剣

待機状態：1、携帯電話、2、杖

モード形態：5つ

フォーム形態：1、ジュエル 2、ルイン 3、デス+?。

## 第一話『出向任務前夜』（前編）（後書き）

現在キャラクターの募集をしております。  
詳しくは、活動報告に書いてるので、興味のある方お願いします。

## 第一話『出向任務前夜』（後編）（前書き）

ほとんびり一日で書き上げた。

誤字脱字については、報告していくださるとありがたい。  
バトルは、眞面目に書くのは初めてだったのだが、変えたほうがいい  
といひのアドバイスをお願いします。

おまけは。最早適当……

びつや、お楽しみください。

真っ白なカーテン。

真っ白なシーツ。

ここまでは白くていいのだが、そのインテリアからは想像できな  
いような……漆塗りのように真っ黒に染められた壁のある部屋。  
そんな部屋の中でレンは目覚めた。

「……！」

レンはふりつぶ頭を押さえながら、ゆっくりと起き上がる。  
そして記憶の途切れる手前の部分を思い出そうとした瞬間。

「……！」

突然の激痛！！

正確にいえば、動いたために体のバランスがズレ、寝ていた状態  
ではからなかつた負荷がレンにかかつたため、激痛が来たのだが  
……いや、それ以前に壁にあり得ないほどの速度で叩きつけられた  
のだから、体が痛まないわけはないのだが。

レンは、その痛みを強制的に無視して起き上がった。  
何故なら……。

「おはようござります。レン君」

「おはようござります……コントさん」

そういうのは、見た目からは想像できないが、たった一つしか第七独立武装中隊には存在しない。生存率100%の医療魔導士がいる医務室。

そんな場所なのだが、レンは怯えている。

逃げ出せうとした理由になるのだが、それは……。

「取りあえず、骨折している所を繋ぎますけどいいかな……」

「…………コンテさん。怖いです……顔が」

普段は童顔で、心優しい先生なのだが、このようにふざけた理由で怪我をしてくると般若の形相で、治療をしてくれるので、心の弱い人間なら一発で病院行きだ。（ここも病院みたいなものなのに……）

「取りあえず、骨折の治療をするけどいいかな！！」

「いいです……遠慮させていただきます……」

「取りあえず、骨折の治療をするけどいいかな！！」

「…………どうぞ」

レンは、力なくそう言った。

その言葉を聞いた般若医は、容赦なく、物凄くいたい秘伝の方法で、骨折していたレンの骨をすべて繋げた。

その後、第七独立武装中隊の隊舎中に響くレンの絶叫が聞こえたのは……哀れすぎて書けない。

先ほどの絶叫から、軽く一時間ほど経つた、第七独立武装中隊、『デルタ分隊』のテスクでは、レンとラファインの二人が、机の上に天井に届きそうな書類を積みながら雑談をしていた。仕事と共に。

「骨は繋がっているのに……体が痛い」

「自業自得。仕方ないんじゃないかな、あそこであんなことを言わなければそんな体にはならなかつたのに……」

レンは、ラファインの目的を射た言葉に少しだけ、この野郎……と感じたがその感情を目の前の書類を見て、すべて無に帰す。そして、口調もいつもと変わらない平淡な声にして、事務的な内容を話し始める。

「それについては、何も言えんのだが……。そんな事より、これでしばらくの書類の整理はしなくてよくなつたか？」

「うん、デルタ隊からいろんなところに言つている隊員にも連絡したからこれで終わりだよ」

「それは良かつた……」

そう一拍置いて、レンは完全に脱力しながらこの一言を加えた。

「あとは、アルファ分隊の書類をまとめればいいんだな……」

「そうだね」

「俺……確かに、明日から出向だつた気が……」

「そうだね」

「荷物の整理……これが終わつてからするのか……」

「頑張つて……」

彼らの終わらない夜は長かつた

AM1・20

AM 4:50

「終わった……色々な意味で、終わった……」

「…………（仮眠中）」

あれから約三時間、二人は全力で作業に取り掛かった。たださえ、人数の多い部隊の全員の状況を確認、そして、仕事の指示などを書いた割に三時間で終わったのは奇跡と言つても過言ではあるまい。

「ハファイン……眠りやがつて……」

さすがに、ものすごい疲労と睡眠不足の所為か、レンの活動は停止前まで追い込まれている。

だがレンは、最後の力を振り絞つて部屋に向かった。  
何故なら……。

「荷造りをせねば……」

何故なら、出向の日時は、本日5月15日、午前10時なのである。

そんなこんなで、レンは部屋に向かつ。  
そんな彼に更なる悲劇が襲いかかる。

「こんな時間に何をしてるの?」

レンは背後から聞こえた声に、ゆっくりと振り向く。

そこには、栗毛でロングヘア、顔立ちはレンにそっくりな美形、そして何よりもある部分が平坦な少女、一歩間違えたら、確実に少年と間違われるかもしれないのだが、レンが女の子に間違われるのではそれはあまり気にならない。

そんな不憫な少女の名前は……。

「ジユリア……戻ってきたのか?」

「うん、数時間前に戻ってきたよ」

それだけの会話なはずなのに、レンはテンションがどんどん下がっている。

そんなレンへ、ジユリアはこうつ問い合わせる。

「なんで、あんたはそんなに疲れているの?」

「明日から、俺とエリオットは出向だからな……」

その瞬間だつた。

興味深そうにレンを覗くジユリアは、一瞬で表情を変えると、か

なり驚いた顔でレンに訪ねた。

「出向つてビビッて」「……」

その声はとても大きく、睡魔に襲われていて意識が少し飛んでいたレンを、現実に引きずり戻した。

そして、現実の引き戻されたレンは、言葉を選びながら答える。

「出向つてのは、カリムお姉ちゃんにうちの馬鹿が頼まれて、機動六課つていう部隊に一人くらい出向をせることになつて、暇なエリオットと忙しい俺が選ばれたってわけだ」

「あの女……」

「あの……ジユリアさん」

そうレンが問い合わせると、何かを閃いたようなジユリアは、レンに大声でこう告げる。

「レン!! 今からアンタと私で模擬戦するわよ!!」

「な、なぜに……」

「そして……あたしが勝つたら、エリオットの代わりにレイチルでもセシリ亞でも連れて行きなさい!!」

「いや、だからね……」

「あんたが勝つたら、エリオットとトートに行くのを許すから!!

「……」

「俺に得が無い!!!!」

隊長の命令やら、レイチルとセシリ亞が無理な事……それ以前に、勝つた時の代償を考えると、絶対、戦いたくないレンだったが、色々と言い訳を考えてジユリアに話そつとした瞬間。

「ジユリア、せつから話してくれる?.....」

「問答無用!!--」

明け方の第七独立武装中隊で、恋する乙女の誇りと不幸少年の不幸が激突する!!--

第七独立武装中隊隊舎より北西1?の位置にある、訓練場。

聖王教会の持ち物であった、古いクロシアムを、そのまま再利用しているため土地代などはタダだし、丈夫だし良いことづくしな建物だが、防音設備だけは無いらしい。

過去に何度も破損している。

そんな歴史学者もビックリな建物の中で、史上最悪の理由によって始まる決闘が行われる。

感染者はいないそんな中で、元凶の王者は被害者の挑戦者に向かって、いつづつ。アカコーナー ジュリア アオコーナー レン

「準備はいいわね!!--」

「……………はい」

「いいえ、死にたくないです。ここから逃げたいです。

そんな本音はさて置いて、レンは溜息をつきながらシャドウ・ラ

イトを起動させる。

「シャドウ・ライト、リストード ウェポン・ガンナー」  
(ア解です)

レンの手に握られるは、白と黒の二丁拳銃、レンの基本戦闘形態である。

だが、それを見たジユリアは、少し不機嫌そうに呟つ。

「あたし相手に、手加減なんていい度胸じゃない」

「手加減か」

そう自嘲氣味にレンは呟くと、少しだけ感情が抜けた表情を見せながら、銃を構える。

その銃口の先に、ジユリアを置くとレンは再度呟いた。

「……訓練では本氣を出せない、昔は調子に乗つて本氣中の本氣を連発していたつもりだが、2年前の事を思い出すと、恐怖で身が震えるんでね……」

レンにいつたい何があつたのか、その事件のとき行動を共にしていなかつた彼女には理解はできないつといった表情だつたが、レンは氣にすることも無く、最後につなげる。

「魔導士に必要なものは技量、そつちのまつは本氣でやるから安心しろ」

「……………分かつた」

この一人の会話はここまでだった。

そして二人は、数秒間の静寂に身を任せると、お互ひの武器を田

の前に掲げる。

「頼むぞ、光影の剣、シャドウ・ライト…」

（任せてください、マスター）

「行くわよ、勝利の」「ペルセウス…！」

（Full victory is primarily of

完全勝利を、主に捧ぐ）

この名乗り上げと共に、史上空前の理由から勃発した模擬戦は始まつた。

「（シングル・バレット…）」

三回の炸裂音。

ただ広いコロシアムの中では、あり得ないほどに響いていた。

放たれたのは、灰色の銃弾。

撃ち手はレン。

右に握られた黒いデバイスから、まっすぐにジュリアを狙い、放たれた。

だが、その射線上にいたジュリアは、全く気にすることなく口を構える。

彼女の手元には、目がくらむほどの光を放った矢が置かれている。そして限界まで『』を引くと、レンのはたった魔力弾を田指して、矢を放つ。

「行きなさい。光の矢、ライトニング・アロー……！」

そう言われて放たれた矢は、間近に接近していた、灰色の魔力弾を撃ち抜き、恐るべき速度で、レンを狙う。

「（ソード・バレット）」

レンは、すべての魔力弾が打ち抜かれた事を確認すると、射撃戦は不利と考え、戦闘スタイルを切り替える。

一つの銃口から現れた剣の長さは、60？弱。

左腕の白き拳銃を少し後ろに引くと、その刃を振るい、自らに迫つていた光の矢を、ギリギリの所で叩き落とした。

だが、落としきれたはずのレンの顔は険しかった。

そして、状況が芳しくない事を描いと思つたレンは、シャドウに作戦の変更を告げた。

「シャドウ。接近戦に変更する

（兵装はこのままで宜しいですか？）

「ああ、行くぞー！」

その様子を見ていたジユリアは、レンが何かを仕掛けてくると考え、すぐさま次の一手を放つた。

「撃ち抜く羽の矢よ、舞え！！ フューザー・アロー」

彼女の手元には、5本の矢が現れた。

そして彼女が弓を横にし、その矢をすべて同時に放つと、すべての矢は複雑怪奇な動きをしながらレンを襲つた

接近しようと、構え一気に距離を縮めようとしていたレンは、その矢を見て表情をさらに険しくすると、迫りくる矢を撃ち落とそうと左腕の白き銃の刃を消し、

シャドウ・ライトを構えるが、複雑な動きをする矢を捉える事ができず、レンは防御に切り替える。

「（ライト・ウイニング）！！」

その掛け声とともに、レンの背中からは一翼の翼……純白の翼が姿を現す。

純白の翼は、レンを狙っていた5本の矢が当たると、音も無く消し去つた。

「よし……」

先ほどの矢の影響で、砂埃が舞い上がり、視界の状況は最悪となつた。

それを好機と見たレンは、ジユリアに悟られぬように術式を発動させる。

（六式転移陣）

一瞬で足元に転移用の術式が現れると、レンは田測と予想でジユリアの座標を計算し、その背後に来るようセシトすると、すぐさま転移した。

レンの完全勝利

はずだった。

の

レンが転移した先で、銃を構えて撃ち抜くはずだった。  
だが、彼の視界に移っていたのは、銀色の弓に真っ黒な矢をセッ  
トし、自分を目の前で狙っているジュリアだった。

「ダークネス・アロー……」

その声を聞いたレンの時間の流れは、何十分にも何時間にも思え  
るほどであった。

そしてその時は着た。

限界まで弓を引いていた手は、離され。

その瞬間、真っ黒な矢がレンを撃ち抜いた……。

「案外、アツサリ勝てるものね」

そう軽く吐き捨てるジュリア。

レンとジュリアの対戦回数は異常に少ない、それに加えてここ数年は、模擬戦をやつた事がなかつた為、彼女はもう少し苦戦するとも考えて、いくつか手を用意していたのだが、いつも簡単だといろんな意味で取り越し苦労だと考えた。

「まあ、良いか、明日からヒッオットと一緒になんだから~」

ほんの少し、うわの空氣味に彼女は言つと、瓦礫に埋まつているであろうレンを無視して、出口へと歩き出した。

「…………2ndフォーム（ブラスト）」

ジュリアは、体全身に鳥肌が立つていた。

背後の瓦礫の中からは、かなりの魔力と殺氣が感じられる。  
そして次の瞬間……

「デルタ・バレット……！」

その声と同時に、灰色の閃光がジュリアが見ていた瓦礫を吹き飛ばし、破片を彼女へと飛ばす。

そして、ほとんど無くなつた瓦礫の中からは、淡く灰色に輝くレン・クロフイールの姿があつた。

「わざわざ本気は出さないって言つてなかつた！？」

もう言つジユリアの問に、レンは少し笑いながら答える。

「これを本気つて言つのか？ 確かに魔力の消費と力についてはフルドライブやコマットブレイクより上だが、本気ではないと思つぞ、多分だけどね……」

そう言つてレンは、軽く頭から血が流れている事に気づきながら、再びシャドウ・ライトを構える。  
そしてジユリアもペルセウスを構えた……。その時だった。

「お前ら……朝方からつるさんだよ……」

その声の主は、この戦いの間接的原因のHリオットだった。  
レンは、Hリオットに『黙つて、まだ模擬戦は終わつてないんだ』と言おつとしたが、  
その前に……

「Hリオット……『めんね。もう止めるから……』

ジユリアが戦意を喪失したため、この模擬戦は引き分けに終わつた。

この結果がレンにとっては、一番まともなものだったのは、誰が見ても異論はあるまい。

そしてそれから一時間あまりして……。

「眠いんだけど……」

「諦める。お前が招いた結果だ」

第七独立武装中隊のある山の奥から、車で少し出たところでレンは助手席に座りながらエリオットに話す。だがエリオットは、簡単に流すとすぐさま運転に集中する。

朝方の出来事の後、レンは、仮眠を取りついで部屋に戻ったのだが、そこで大事な事に気がついた。

俺……今から荷造りしないと……

本来の用事を、ジュリアの邪魔されていた事を思い出したレンは、急いで準備をした。

必要なもの、必要なもの、必要じゃないもの、必要なものなどを荷造りしてレンは、車のトランクに乗せた。

そこまでが今現在までの、レンの行動である。

レンはエリオットが話してくれないので、睡魔に負けそうな思考を取りあえず、書類に向けた。

その書類には、こう書かれていた……。

『……機動六課出向隊員名簿。レン・クロフィール一等空尉　エリオット・ラージュストー一等空尉……』

レンは、一瞬自分の目を疑い、そして自分の頭を疑つたが何度も見ても文字は変わらない……。

少しパニックになりながらもレンは、エリオットに聞いてみる。

「エリオット……。これは俺の目が悪いから一等空尉に見えるのか？」

「お前……いきなり何を言いだすんだ！？」

そう言って、睡眠不足の所為かレンもおかしくなつちまつたな……的な目でレンを見たエリオットだが、書類のとある部分が目に入るとエリオットも答えた。

「いや……間違つていない。あの馬鹿野郎が、俺たちの階級を書き間違えたか、故意に変えたって所だらう……」

そして数秒の沈黙が流れた後で、二人はほぼ同時に同じ判断を下した。

「「戻るぞ……」」

この後、第七独立武装中隊の隊長室を襲撃した一人だったが、馬鹿と言つてしまつた為、壁に埋められた拳銃、壁を貫通して地面にたたきつけられて、医務室送りにされた。

その医務室では、般若の顔をしたコンテが、彼ら一人が起きるの

をずっと待っていたそ�だ……。

ついでに一人は、AM10:00までに機動六課にたどり着けたのかは……次回のお楽しみに。

レン + ハリオット

「レン・クロフイールとハリオット・ラージェストのオールナイト全時空！」

レン

「おまけは久しく書いていないので、何が起きるかわからない……作者からの注意書きでした」

エリオット

「時間がないから、ゲストを呼ぼう。魔法少女リリカルなのは留まらない流れ より」

レン

「村雨流留さんです、ではこちりへどうぞーーー！」

流留

「どうも。村雨流留です」

レン

「作者も面倒だと思つたからって……適当にするなよ……」

ヒリオット

「キャラクターの個性をどう表現できるかが重要なの」、これで失敗だな

レン

「やはつ個性を書きやすくなるなら、イコさんのせつが楽だつたかな……」

ヒリオット

「それはまた後日こするらじしー、機会があつたなら……」

流留

「おい……」

レン

「スマン、完全に無視しかけてた」

流留

「無視しかけてたつて、無視したのか？無視してないのか？」

レン

「中間地点？」

ヒリオット

「やはり突っ込みだけでは話が進まないみたいだな……」

レン

「それには同意だけど、今からヘタレを出すの?」

流留

「ヘタレって、どんな奴だ・・・」

流留

「えっと・・・逆立ちしてピアノが弾けない奴・・・」

流留

「引ける訳ないだろ・・・普通に考えて」

流留

レン  
「まあ、それを言つたらそりなんだけどね・・・一応、そりこりハーナーだつたし」

Hリオット

「『ハーナーを考えた作者に文句を言つて、ラフマインを励ましてやつてくれ・・・』

流留

「お前たちって、薄情者なんだな」

レン&Hリオット

「――」「――」

流留

「図星か」

レン

「――・・・さて、宣伝の時間です――!」

エリオット

「今回宣伝する作品は、流留君が主人公の魔法少女リリカルなのは  
は 留まらない流れ です」

レン

「J.S事件が終わって一年後、悪用されたロストロギアの為に復活した機動六課。そんなタイミングで忙しいハ神はやてが、一人の男……村雨流留と出会った為に始まった物語」

エリオット

「以下略」

流留

「そこは、略しちゃダメだろ」

レン

「突っ込み禁止……さて今回の放送はここまでです」

エリオット

「次回はどんな方が来てくれるのでしょうか?」

流留

「おい、人の話を……」

レン&エリオット

「では、次回をお楽しみに!~!」

流留

「だから……（残りは放送時間外）」



## 第一話『出向任務前夜』（後編）（後書き）

次回から、第一部、六課編スタート  
おまけは少しだけ後悔しているが、気にしている余裕がなかったので  
……以下略。

感想、ご意見、文句、お待ちしています。

次回のゲストは誰だろう？

第三話『機動六課出向』（前編）（前編め）

若干犯罪が、ヒリオットが変態に……

## 第二話『機動六課出向』（前編）

『航空魔導士隊からの特別出向隊員名簿』（前回、レンが最後に行っていた資料です）

名前：レン・クロフイール

年齢：17歳

身長：176.6cm

体重：57kg

誕生日：2月3日

階級：二等空尉

所持資格：戦技教育、小隊指揮官（実際は大隊指揮官）、バイク免許、特殊デバイスマイスター。

魔導士ランク：古代ベルカ式、空戦S

希少技能：多重術式

魔力変換資質：凍結

デバイス：シャドウ・ライト

名前：エリオット・ラージエスト

年齢：17歳

身長：177.1cm

体重：61kg

誕生日：11月18日

階級：二等空尉

所持資格：戦技教育、小隊指揮官（実際は中隊指揮官）、普通自

動車免許 A級デバイスマイスター。

魔導士ランク・ミッドチルダ式、総合S+

希少技能：無

魔力変換資質：炎

デバイス：フォルス

さわやかな風、青い空、空高くに上っている太陽。  
そんな最高の天氣の中に、絶望に打ちひしがれている一人の姿があつた。

「ヤバイ、遅刻では済まされないぞ」  
「俺は……行きたくない」

彼ら。レンとヒリオットが見ているものはとても大きな建物……  
時空管理局古代遺物管理部機動六課の隊舎なのだが、彼らは一向に入ろうとしない。

それもその筈、現在の時刻は午後1時過ぎ、本来は午前10時には着いていなければならなかつたのに、彼らは三時間の遅刻である。

「取りあえず、コツソリ入つて、迷子になつていた振りつてのはどうだ？」

「目の前に入口があるから迷子は無いだろ、普通は……」

エリオットが考えた言い訳を、一瞬にして看破するレン。  
そんなレンに対して、エリオットは次のよつに話を振る。

「じゃあ、レン。お前だつたひじりするんだ！？」

少々、言葉を強くしながら、レンに意見を求める。  
少し明後日の方向を向きながら、考え始めるレン。  
だがすぐさま考えがまとまつたのか、エリオットのほほつを笑顔で  
見返す。

「名案がある……」

少し意外だと言つた顔で、レンを見るエリオット。  
レンの浮かべていた笑みは、なぜか少し崩れていたが、エリオットは気にせず聞いてみる。

「名案つて、なんだ？」

「…………素直に謝る」

「それ、名案でも何でもないだろー？」

レンが言つた当たり前のこと聞いて、エリオットは思いつきつ  
ツツコミをつれる。  
だが、レンは何とも言えない表情でエリオットに文句を言つてみ  
た。

「エリオット……」

「なんだよー？」

「俺を叩くのは自由だが、お前もなにも思いついていないのだから  
文句を言われる筋合はないと思うんだが……」

「…………」

レンの言葉に、何も言えなくなつたエリオットは、黙り込んで明後日の方向を見る……。

その様子を見て、レンは若干ため息をつきながら、エリオットとは反対の方向に、無意識に目をやる。その瞬間だつた。

「桜の……木？」

レンが見たものは、彼が失つた幼き日の記憶の欠片に残つていた薄い桃色の花を散らせる木……それを見た、レンの視界と思考の両方はその木の存在で埋め尽くされた。

数分。  
数十分。

そんな時間が過ぎるのをレンは感じた。自らの記憶にない、幼き日を思い浮かべる事が今の彼にはできそうだつた……。

だが、時間の流れと、友の存在がそれを阻んだ。

「レン、いつまで思考回路を停止させる気だ……」

若干自暴自棄気味なエリオットは、何度話しかけても無反応なレンの頭を、少し戸惑い気味に叩いた。

その為、思考の海にダイブしていたレンは、飛躍的に意識を呼び戻された。

その後、後ろを振り返つたレンは、田線の先に一台の車とその上に乗つてゐる、確かにこの部隊の部隊長らしき人と小さな少女を田にした。

「…………エリオット」「どうした、レン？」

そんな会話の間に、車はレンの視界から外れ、車は先ほど彼らが通ってきた元を進んでいく。

若干呆然としながら車を見送ったレンは、半分氣の抜けた声でエリオットに話しかける。

「いや…………たった今通った車に、この部隊の隊長さんがいた気が

……」「どの車だ……」

レンの言葉を聞いて、咄嗟に後ろを振り向いて道に出るエリオット。

しかし、もはや見える範囲に車は無く……見渡す素振りすら悲しく思えてくる。

意氣消沈しているエリオットは、かなりテンションを下げた状態でレンにエリオットは……。

「どうする…………？」

そう言われたレンの方は、物凄く困った顔をしながら数秒ほど思慮して、

すぐさま、妥当と思われる案を出す。

「取りあえず…………早く行つたほうがいいんじゃないのか？　もしかしたら、俺たちが何時まで経つても来ないから、捜索されてたりしてるかもしねりいし……」

若干悪ふざけの入ったレンの言葉、彼は、実際に探すなら申し出に見つかっているはず、と思っているのだが、エリオットはこの言葉を真に受けてしまつたらしく、『今更ながら、怒られるのは嫌だ!!』と言つて走つて行つた。

「なんであこつは、余計ややこしくなる方を選ぶんだ?」

若干の疑問符をつけながらレンは、エリオットの後をゆっくり追いかける……。

この後、悲惨な目に遭つことも知らないで……

若干時間を進めて、もうお昼時を完全に過ぎたころ……。  
なぜか迷子が悪化している一人がいた……。

「「「こりは、どにだ!!」」

右を見ても左を見ても、部隊の隊舎が見えるのはいい……。だが、入口が見当たらないのだ。

若干方向音痴のレンと完全方向音痴のエリオットは、どちらが悪いという以前に一人で迷子である。

「…………窓から入るのが、一番では？」

「それはちょっと待て」

レンはエリオットが止めるのを無視しながら、窓枠に手をかける。レンは、この確実に泥棒と間違われるフラグを踏みながら、中に入った。

「おい、人の話を聞いているのか！！」

「聞いてない……」

若干会話が成立する一人。

レンの後を追つて、窓から建物の中に入ったエリオットが見たのは……。

「ここは……ロッカー室か？」

「もしくは、更衣室つて行つたところだな」

レンとエリオットは、レンが言った『更衣室』といつ単語に、かなりの冷や汗を流しながら、何も言わずに外に出ようとしたらどう……入口が開いた。

入口が開く瞬間。

レンとエリオットは、お互いに咄嗟の判断で向かい合つたロッカーに隠れた。

彼ら二人がロッカーを閉めると同時に、青い色の髪、短めな髪型をしたボーアッシュな少女が入ってきた。

入ってきたのが女子子であったことを確認したレンは、エリオットに念話で話しかける。

『ヤバイ……』完璧に女子更衣室だ……』

焦るレンは、エリオットに出来るだけ大きく聞くよハヤシノハヤシノハヤシを伝えた。

だが、エリオットの回答は、レンがドン引きするくらいのものだつた。

『折角だし……もつもつ見てよハヤシノハヤシ』

エリオットの、馬鹿らしい声を聞いて、『おい……』と念話を飛ばすが無視される。

その間に、入ってきた窓は閉められ、同時にカーテンも閉められる。

『おいおい……マジで俺、犯罪者になるじゃねえか……』

レンは、そう考えながら、田を開け、この現場での打開策を考える。

そんな中で青髪の少女は、エリオットが入っているロッカーの前に立つた。

『レン、助けてくれ……』

その声を聞いて、田を開けたレンは、少女がエリオットのロッカーを開けようとしているのを見て、冷たくこいつ返した。

『諦めろ、血業自得だ』

「うーん、レンは、ロッカーの十字を切る。  
それと同時に、ロッカーは開けられた。

……。

数秒の静寂と田線が見事合ひて、銀髪と青髪の少年少女……。

「や、やあーーー！」

若干自暴自棄気味のヒリオットは、少し焦りながらも、いつもと変わらぬ声色で少女に話しかけるが……当然のじとく。

「わやああああああああああああああああーーー！」

少女の悲鳴がこだました。

その少女は、悲鳴を上げると同時に、ヒリオットに向かって、恐ろしい速度で右ストレートを打ち出す……。

「危なつーー！」

ヒリオットは、少女が繰り出した右ストレートを、ロッカーから飛び出す事で回避すると、反対側のレンの入っているロッカーの前に来て……。

「ここにいるのは、俺だけじゃない……ここもここも

レンが入っていたロッカーを開けた……。

「貴様、何といつ事を……」

レンがヒリオットを呪つよつて言葉を紡ぐと同時に……。

再度、扉が開いた……。

入つてくるのは、オレンジ色の髪をした、ツインテールの少女。入つてくるなり、レンと目が合つ。

「スバル、何を騒いで……」

「…………」

「…………」

目が合つと同時に思考が停止する一人。物凄く重い空気の中でレンは、

「お嬢さん、今日は天氣がとてもいいですね……」

「ええ……」

「…………」

四人がいる部屋の空氣は、完全に固まつた。何時まで経つても打開策の浮かばない状態、この状態で確実に刑務所行きを感じ取つたレンは、エリオットを掴んで、全力で窓から飛び出した。

「逃げるぞ……」

レンはそう言つと、ヒリオットを置いて全力で走りだした。

ヒリオットも、部屋の中にいる一人が出てこないという。……。

「待つてくれ……！」

と言つて駆け出す。

逃げ出した二人を見つめていた、少女二人組……スバルとティアナは冷静な判断を取り戻して、誰かに念話をすると、逃げる二人を追いかけ始めた。

レン&ラファイン

「レン・クロフィールと+ のオールナイト全時空！…」

レン

「はじまりました、全時空……」

ラファイン

「なんで僕が出だしから？」

レン

「それは……あれを見ればわかる

レンが指を刺した先には……ジユリアに正座をさせられながら説教を受けているエリオットの姿があった。

ラファイン

「…………何をやっているの？」

レン

「痴話喧嘩……」

ラファイン

「ああ、今日は何が原因？」

レン

「このピートオ……」

レンが示したのは、年末慰安旅行！！　IN不死鳥温泉……！  
と書かれている。

ラファイン

「何があったの？」

レン

「バルトさんとエリオットが、ほかの変態たちと一緒に風呂を覗  
こむとしたんだ……」

ラファイン

「ああ、自業自得か……」

レン

「時間の都合により……痴話喧嘩の内容は、次回とさせていただきます」

レン＆ラフアイン

「では！！」

第三話『機動六課出向』（前編）（後編）

痴話喧嘩の行方は！？  
次回の更新を待て！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3396j/>

shadow,If もしも奇跡が起きたなら。

2010年10月9日22時00分発行